

モンゴル医療援助活動に参加して

Participation in Medical Aid Activities in Mongolia

岸本崇史

Takafumi KISHIMOTO



(きしもと・たかふみ)
ICDフェロー
愛知学院大学歯学部
保存修復学講座

2021年に入会させていただきました岸本崇史と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、今回ご紹介するモンゴル国における医療援助活動は、日本口唇口蓋裂協会を中心とし、愛知学院大学をはじめとする近郊の医科大学ならびに愛知県所在の企業との協同によるもので、1997年より事業が開始されています。

私がこの医療援助活動に初めて参加させていただいたのは、2013年の愛知学院大学大学院2年の時です。医局の前教授である千田彰フェロー、現ICD日本部会副会長の富士谷盛興フェローにお声掛けいただいたのがきっかけです。その後、2016年、2018年と計3度参加させていただきました。

モンゴルは、残念ながら海外旅行の候補にあまり挙がったりしないので、ほとんど情報がなく、私にとりましては未知の国へのボランティア参加でした。現地に到着し、まず衝撃を受けたのが、チンギスハーン国際空港から首都であるウランバートル市内への道路が信号機のない砂利道であったことです。これが発展途上国の現状かと感じました。しかし、5年後に訪れた時には信号機も設置され、きれいに舗装された道路となっており、急激な経済成長を遂げていることを感じとることもできました。また、モンゴルでの食事は、口に合うか心配でしたが、伝統的な料理であるポーズ（餃子のようなもの）やゴリルティシュル（うどんのようなもの）は非常においしくいただくことができました（図1）。しかし、料理名は忘れてしまいましたが、見た目のインパクトのみならず、味もかなり独特でなかなか箸がすすまなかった料理もありました（図2、3）。

実際に診療を行う場所は年によって異なりますが、私が参加したのはウランバートルから車で1時間半ほど離れた「ナライハ」や「ウルジー」という地区でした。これら地区の周りは都市部とは全く異なり、私がモンゴルに訪れるまで抱いていた「広大な大草原が広がっている」というイメージのままであり、小学校の国語授業で習った「スーホの白い馬」で描かれた草原そのものでした。そして、歯科医療援助活動はその中にある一集落で行われました（図4）。そのため、私が参加した地区にはしっかりと設備のある歯科診



図1 モンゴル風うどん
Fig.1 Mongolian Udon



図2 インパクトのある伝統料理
Fig.2 Traditional cuisine with impact



図3 食べる直前
Fig.3 Just before eating



図4 診療を行った地区の風景
Fig.4 Scenery of the district where the clinic was held



図5 診療風景
Fig.5 Treatment scene



図6 ボランティア学生によるブラッシング指導
Fig.6 Brushing instruction by volunteer students

療所はなく、歯科治療を受けたことがない子供たちがたくさんいるのが現状でした。

医療援助はまず診療場所の設営からスタートします。長机に布を敷き簡易の診療台を作り、器材等を配置します。準備が整い次第、愛知学院大学口腔病理学講座（現 口腔病理学・歯科法医学講座）の先生による口腔粘膜採取、歯科医師による口腔内診査、治療、そして歯科衛生士、ならびにボランティア学生によるTBI、フッ素塗布という流れで診療していきます。治療に関しては、しっかりとした設備がないためART法（非侵襲的修復技法）による処置となります。手用切削器具であるスプーンエキスカベータにより感染歯質を可及的に除去後、グラスアイオノマーセメントを填塞します。診療時には日本語はもちろん、英語も通じないため片言のモンゴル語（アングー【口開けて】やハツ【咬んで】など）を駆使して行っています。どうしても通じず困ったときは、ボランティアのモン

ゴル人に通訳をしてもらいながら治療を進めていきます（図5、6）。

子供たちの多くは、現在の日本の子供たちにはみられない多数歯カリエスが認められる状況です。いわゆる「むし歯の洪水」状態です。おそらく、急激な社会の発展と食生活の変化による子供たちの口腔内環境の激変・悪化に親たちが付いて行けず、いわゆる「みそっ歯」状態に陥ったと考えています。そのため、親御さん一人一人に対し千田フェローより口腔内管理の重要性について熱く指導が行われました。このようなことを2日間行い、のべ300人ほどの子供たちの治療を行いました。

ここ3年間は、COVID-19 Pandemicの影響で歯科医療援助活動は休止しております。今後口腔内環境に関する意識が高まりこのような子供たちがいなくなることを願い、この事業が再開されたときには再度参加したいと考えています。